

最後の将軍

司馬遼太郎



文春



文春文庫

105—1

最後の将軍

定価はカバーに
表示してあります

1974年6月25日 第1刷

1983年11月15日 第17刷

著者 司馬遼太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 千102

TEL 03・265・1211

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

最 後 の 将 軍

司馬遼太郎



文 藝 春 秋

最後の將軍——徳川慶喜——

人の生涯は、ときに小説に似ている。主題がある。

徳川十五代將軍慶喜（よしゆき）というひとほど、世の期待をうけつづけてその前半生を生きた人物は類がまれであろう。そのことが、かれの主題をなした。

この人物は、將軍家にはうまれていない。

徳川將軍家の分家である水戸（みと）の徳川家にうまれた。水戸を御三家（ごさんけ）のひとつという。御三家は、水戸のほか、紀州、尾張がある。

この御三家のうち、水戸はもっとも石高がすくなく、官位も他の二家が大納言（だいなごん）であるのに対し、中納言でしかない。それに將軍家に嗣子（しし）がない場合、紀州・尾張から入ることがあっても水戸から入ることはなかった。いわば、一格さげて差別されてきている。

もっとも、ただ一つの点で他の二家よりも優遇されていた。当主は参観交代（さんかんこうたい）の義務がなく江戸屋敷に常住する特権があたえられていることであつた。將軍とともに江戸にいる、ということである。「天下の副將軍」

といわれた。講釈で高名な水戸黄門以来、江戸の庶民はそう言い囃（はや）している。副將軍という官

制は徳川幕府にはないが、諸事御政道の批評にめくじらを立てる幕府が、江戸の講釈場あたりからうまれたらしいこのことばに神経をとがらさなかったのは、氣分的にはそういう礼遇を幕府は水戸家に払っていたのであろう。

慶喜は、その家にうまれた。

父は、烈公齊昭である。

「水戸の御隠居」

と、その後半生のころは天下の志士たちから敬慕された。志士たちは、「水戸の御隠居さえ世に立てば夷狄のわざわいは去り、日本は救われる」と信じ、ほとんど神格化した。むろん、時勢の異常さがうんだ幻覚のひとつである。齊昭は、實際の能力こそさほどではなかったが、資性豪邁で、藤田東湖など輔弼の名臣が多く、しかもこの家は幕末の救国思想の支柱になった水戸学の家元でもある。それに烈公齊昭は副將軍的意識がつよく、江戸城でもその氣概をもってふるまった。自然、雲の下の志士どもに英雄豪傑をあおぐがごとき幻覚をあたえたのもむりはなかった。

現実の烈公齊昭は、たとえば女色に卑しすぎた。この卑しさはほとんど病的なほどであり、將軍家の大奥に入りこみ女官を手籠めにしようときえした。この性行のために江戸城大奥の女官たちから毛虫のようにきらわれ、この大奥の不人氣がかれの政治生命にまでひびいた。

が、好色にも功がある。齊昭には子女が多く、男子だけで二十一人を生み、そのうち成人した者は男子十二人、女子六人、計十八人をかぞえ、このことが家門繁榮に幸いした。

烈公齊昭の正室は、京からきた。有栖川宮家の王女で、未婚のころは登美宮吉子といった。こ

の縁談がおこったとき仁孝天皇は大いによろこばれ、「水戸は武臣とはいえ、代々勤王の家である。登美宮にとってこれほどの良縁はない」

といわれ、すぐ勅許があった。

吉子の聡明と美貌は、宮廷でも定評があり、そのことが水戸家にもきこえていた。斉昭はこの妻をよろこび、

「美貌にはかけがえがある。聡明にはかけがえがない。この妻によってねがわくは英才をうみたい」

とし、まず一児を得た。斉昭には他にわき腹の男子がいたが、家督は当然正室の子が継ぐ。これが、鶴千代、のちの水戸家十代慶篤である。成人して京都ふうの柔和な顔になった。性格がよく、斉昭ごのみの武張ったところがない。斉昭は失望し、

「どうやら宮家のよわよわしい血のほうが勝ったらしい」

といった。つづいて男子が相ついでうまれた。かならずしも正室吉子の腹ではない。それぞれ数字を名乗らされた。二郎麿、三郎麿、四郎麿、五郎麿、六郎麿である。このうち二と五が吉子の腹であった。二は早世し、五は少年になりゆくにつれてやはり堂上風の容貌性格になった。

「京の血の濃さよ」

と、斉昭はいった。武門の血が、宮家の血に押されたという意味であろう。五郎麿は養子むきである、他家にやる、と斉昭は言い、やがて因州鳥取の池田家へ養子にやった。のちの鳥取藩主池田慶徳である。

ほどなく、吉子の腹から慶喜がうまれた。

七郎麿と名づけられた。

「この子は、武門の血か宮家の血か」

斉昭は、その子の襁褓むつぎのころからさまざまの期待をこめて観察していた。

斉昭は、諸事異風の人である。とくに教育熱心ということにおいてそうであった。その教育熱心さは、斉昭自身、その少年時代、乳母うはに教育されるのをきらい、

——男子は男子の手で育てられねばならない。

として自分で父に頼み、乳母を廃し、屈強の藩士ふたりを傳人めんとにえらんでもらったほどであった。当然、常の大名とはちがい、わが子へのそういう意味の関心が強烈であった。

大名の子弟は、江戸で育つ。江戸屋敷で育てねばならぬのが、幕府の法である。幕制では大名の子を人質と解釈している。

しかし斉昭はとくに幕府に乞い、水戸家だけに例外を認めてもらっていた。子は江戸屋敷でうまれる。しかし嬰兒えいじのあいだに江戸を離れさせ、国もとの武骨な藩士の手で育てさせた。都府の華美の風が感染するのをおそれたのである。

それが家法である。慶喜も、そのようにさせられた。江戸人というよりも、水戸人たるべく育てられた。

このため誕生の翌年、江戸小石川邸を去り、その後ずっと常陸水戸城ひたちにいたため、父母の目に触れることがなかった。慶喜が十歳のとき、斉昭はひさびさで国へかえり、成長した慶喜をはじ

めて見た。

「あの子だけはちがう」

と、老臣たちの前で人相見のようなことをいった。京の堂上ふうではないというのである。

天晴、名将とならん。されどよくせずば手にあまるべし。

と、斉昭はいった。斉昭は心中、徳川家の家祖である家康の再来を期待した。

「よく躰けよ」

と、老臣、傳人、奥の女どもに厳命した。この斉昭の期待が、当然、藩士たちの期待になった。「大名はただの武士よりも強くなければならない」

というのが、斉昭の思想であった。子弟の教育はこの方針によっておこなわれた。慶喜への期待が大きくなればなるほど、その躰はきびしくなった。

「武士は寝相をよくするものぞ」

と斉昭は平素言い、いきなり慶喜の寝室に入ってきてはその寝相をたしかめた。慶喜は寝相が悪かった。

「あのようなぐにやりとした寝相では武士の性根が入らぬ。七郎麿の枕の両側に剃刀の刃を立てよ」

と、斉昭は側の者に命じた。その夜から、二本の剃刀をつののように立てた枕で慶喜は寝かき

れた。寝返るとき、ひっそり寝返らぬかぎり頭や顔が切れるのである。

さらに傳人の井上甚三郎は、

「武士たる者は、右下の片寝をなさるべきでござりまする」とやかましくいった。利き腕である右腕を下にすべきだと井上はいう。もし寝込みを敵に襲われて腕をとられたとき、右下ならば利き腕は自由になる、鬨める、というのである。このため慶喜は老年にいたるまで右下の片寝のみをする習慣になった。

（こんな躰が、何になるのか）

とは、少年の身だから思わない。斉昭は、大名とは選ばれたる武士だという。この少年が受けつつある教育は、尋常の武士の家庭では想像もつかぬほど、峻烈なものであった。衣類、夜具はすべて麻か木綿で、絹はいっさい用いさせられない。その日課は早晩に起き、手水をつかうとすぐ侍臣が後見して四書五経を半巻音読させられ、そのあとで朝食になる。朝食後、午前十時までは習字である。習字がおわると公子はみなそろって藩校の弘道館に登校し、正午にかえり、昼食のあとしばらく遊戯をゆるされる。午後は武芸である。夜は、食後、朝の四書五経の読みのこしを読まされ、一日の日課がおわる。この日課はたがうことを許されない。

これほどの手きびしい躰と教課に縛られていながら、七郎麿、慶喜は従順ではない。しかし斉昭は従順を強いた。七郎麿は体をつかう武芸には熱心だったが、読書がひどくきらいだった。侍臣が手こずり、

「読書を否ませ給うなら、お指に大きな灸をすえ奉ります」

といい、ついに食指を出させ、大もぐさですえた。指がちぎれるほど痛かったが、しかし七郎麿は堪えた。読書をするくらいなら灸を我慢したほうがましだと広言し、ついに灸がたびかさなつて灸点がただれ、腫れあがるほどであったが、七郎麿は平然としていた。侍臣ももてあまし、斉昭に訴えると、

「予が命である。即座に座敷牢へ入れよ」

と命じた。すぐ牢がつくられた。座敷の一角の一坪ほどを四囲ふすまでかこい、縄をもって外側を結いまわし、そのなかに入れて食事もあたえない。これには少年も閉口し、いくぶん従順になった。しかし修学の態度は相変らずふまじめであった。この少年が学問に興味をもったのは二十以後のことで、それまでは「武芸七分、学問三分であられる。せめて五分々に漕ぎつけられねば水戸の若君と申されませぬ」と川路聖謨に批判されたとおりの生活であった。

平素、軽躁で遊びに狡猾さがあり、可愛気がなく、奥むきの女どもには好かれぬ少年であった。兄の五郎麿は、おとなしい。女中を相手に雛人形をかざつてあそぶのが好きであった。その部屋へ突如七郎麿が入ってきて、

「五郎様は、面倒なことをなさる」

と言ひ、いきなり雛壇の上の人形をつかんでことごとくこわしてしまった。五郎麿付の女中は、——七郎君は、諸事よろしからず。

とささやきあつて、憎んだ。

それでも斉昭がこの少年に期待したのは、ひとつには並はずれて雄渾な書をかくことによつて

であつた。書は体をあらわす、とこの当時信じられていた。

「いずれ、あの子は何者かになる」

と、齊昭はつねづねいつた。心底、ゆくゆくは將軍の家を継ぐ運をつかめ、とひそかに願うところがなかつたとは言えない。

少年のころ、紀州徳川家から水戸へ養子を懇望してきた。紀州ならば願ってもない縁組の相手であらう。側用人の藤田東湖が齊昭に内意をきくと、

「七郎麿はやれぬ」

と、言下にいつた。世子の鶴千代が万一のときに七郎麿をひかえに残しておく、というのである。

「まあ五郎麿をやろう。あれは人形あそびなどをして毒にも薬にもならぬゆえ、養子にはうってつけであらう」

御三家頭の紀州家にさえやろうとしなかつたのは、齊昭には、「世子の控え」というよりも別に魂胆があつたと思えない。もっともこの紀州家養子の件は先方に都合があつてつづれ、五郎麿は池田家に行った。

その後、慶喜——七郎麿に別な運命がおとずれた。弘化四年、慶喜がかぞえて十一歳の夏、幕府の筆頭老中である阿部正弘（伊勢守）が水戸家の家老中山備後守を屋敷によび、

「内々の台慮（將軍の意思）であるが、七郎麿どのを二橋家の御養子にせよと申される」

といつた。内々とはいえ、「台慮」という言葉が出た以上、將軍（十二代家慶）の命令と同然で

ある。

が、家老中山は、

「はてはて七郎麿様以外の他の公子ならばいかでござりましょう」と言い、その理由をのべた。七郎麿を、斉昭が世子の控えと称しているためお放しなさるまい、というのである。

（馬鹿家老だな。裏がわからぬのか）

と、老中阿部正弘はおもった。阿部正弘は性聡明で思慮ぶかく、幕末における幕府政治家のなかでは出色の評判がある。阿部正弘は、幕府や將軍家大奥からきらわれている水戸斉昭という危険人物に魅力を感じ、それと提携して国政の難局に処そうという秘謀をもっていた。難局とは、海防問題である。ペリーの来航という衝撃的な事態がくるのはこれより数年後になるが、それでも沿岸にしばしば欧米の艦船が侵航し、政局にはつねに戦慄がたえない。この点、極端な武力攘主義者である水戸斉昭の頭脳と胆力と人氣を借りるほかないと阿部正弘はおもっている。しかし公言はできない。なぜならば斉昭はその矯激な政治的言動を忌まれ、小石川屋敷で幽居中の身であった。

（しかし、かの人には毒であっても用い方では薬になる。他日のため、歡心を得ておきたい）

というのが、思慮ぶかい阿部正弘の肚であった。歡心、という。歡心を買うことになる。この一橋家との縁組が、存外、氣むずかし屋の斉昭のよろこぶところになるうということを、阿部正弘は大地を見透かすような目で見ぬいていた。

「まあ、そのほう一存でとやかく言わず、歸って中納言（斉昭）様にお話し申してみよ」

と、水戸家の家老を帰した。

齊昭は、その内々のはなしを小石川屋敷できいた。阿部正弘の読みがあたった。齊昭は即座に請けた。

(七郎麿が、將軍になるかもしれぬ)

この齊昭の読みは、棋士が棋面のさきざきを読みとるにも似て複雑なものである。

まず、現將軍は家慶である。あまり健康でもないため長生きはしないであろう。それに家慶のあとを継ぐべき世子の家定は生まれつき虚弱で、正常人の半分ほどの健康ももたず、その生理が特異で女性ともまじわれぬという噂がある。嗣子がつくれぬだけでなくおそらく短命であろう。

となれば、次代の將軍家に養子が必要になってくる。將軍の養子は、水戸家をのぞく紀州家、尾張家という御三家のほか、「御三卿」の家からえらばれる。御三卿とは、一橋、清水、田安の三家であつた。その一橋家に慶喜が入る。

可能性がある。

というところではない。現在、たとえば尾張家には世嗣の子すらないのである。養子を他家から迎えたばかりで、將軍家に子をさしたすなどは考えられもしない。紀州家も当主齊順が去年死に、その死後、菊千代という子がうまれた。生後、まだ一年にならない。これらの事情で御三家は当分、養子を出しうる能力がないであろう。

御三卿のほうは、まず田安家は当主慶頼がやっと元服したばかりでまだ一子もない。清水は空家である。なぜならば紀州の齊順が死んだというので、昨年、清水齊彊が清水家を空けていそぎ

紀州へ養子相続した。

残るは、一橋家である。

この家も、不幸がつづいていた。代々養子が多いが、奇妙なほど若死であった。いまの養子の昌丸まさまるという少年は尾張家からきたが、これもいま危篤きどくの床にある。

その一橋家を、慶喜がつぐ。もし將軍家が養子が必要とするなら、この一橋家からとらざるを得ないであろう。

(となれば、水戸家から、將軍が出るかもしれぬ)

初代らしい、例のないことである。それが斉昭にとって魅力であった。

(もし慶喜が將軍になれば)

と、斉昭の想像はつづいた。斉昭は將軍家実父として江戸城で威をふるうことができるであろう。幕閣も指揮する。大奥も沈黙させる。斉昭にとってかぎらない魅力である。むろん斉昭は野望家であり、そのため幕閣から誤解され忌避されてきているが、しかし斉昭にすればその野望は憂国の公憤から発していた。なににしてもこの日本の国政をにぎることができるであろう。

(勢州せしゅうは、味なことをやる)

斉昭は伊勢守阿部正弘を、そう思った。じつをいうと、斉昭は「智恵勢州」といわれた二十九歳の備後福山城主阿部正弘をよく知らない。この年若い幕閣の首班が、自分に対しこういう微妙な方法で手をさしのべてきていることを意外におもった。

「よろしかろう」